

北野社きたの、やしろ

〔北野地主の神にして、天満宮本殿の後、東より第一の社なり。神祇拾遺云、仁明帝承和三年二月、遣唐使の為に初て天神地祇を祭るとなん、土人北野殿と称す〕

白太夫社しらたいふのやしろ

〔本殿の前東傍にあり。或は云、**聖**■荒魂せいべうあらたまを祭るといふ、一説には**勢州**神主春彦せいしゅうかぬぬしが靈なりとぞ〕

老松社おいまつのやしろ

〔本殿の後にあり、祭る所は菅神御愛松老松の靈なり。八雲御抄に老松北野にありとぞ〕

社 頭 雪

続撰吟

年つもる名も老松の神なれば雪にや跡をたればじめけん

雅 世

朝日寺あさひでら

〔本殿の西にあり、古への遺跡なり。本尊觀世音、立像二尺余〕

毘沙門堂びしゃもんだう

〔朝日寺の南に隣る。本尊立像四尺許、脇士吉祥天女、善膩土童子〕

煙の宮けふりみや

〔朝日寺の南、末社七座の内にあり。梵灯庵心敬僧都連歌ほんとうあんしんけいに志深く、北野連歌堂において、ある会に烟とい

ふ附句秀逸なる事、菅神感応ましくて、手爾於葉の大事、立水の巻、臥龍の巻の二書を授け給ふと云云〕

前句人を送りてかへる野のすゑ

身はいつの煙のために残るらん

心敬僧都

〔篠の目云、此連歌にかなひて北野の宮の末社に煙の宮とて侍り、灯庵主の事やと云云。此僧都は叡山住心院の住職なり〕

此碑画馬殿の西にあり。銘は堀禎助、書は烏石。

銘 曰

烏蹟已降入文聿興衣帛木葉亦与斯文惟願將聖克念入神書草蘊崇功進成山旨北鷄肋宜貽子孫分而為石石可与言龍蛇前蟄母乃生雲滕康桓篆屈正超銘寛保三年癸亥夏四月烏石山人書立於北野廟側

手向山楓樹〔草■碑の南にあり。南都手向山の丹楓を奉りこゝにうつし植る、これ御神詠によつてなり。木蔭に

手向山楓と鐫たる標石あり〕

船宮ふねのみや

〔本殿中門の外西側にあり。北神次第に曰、船宮は一夜の松の霊なり、天曆九年三月十二日、菅神御託宣に吾棲ん所は一夜に千本の松生ずべしとなり。八雲御抄に、一夜松北野にありと云云。〕

新千載集 寄松述懐

一夜松千世の末葉の老木まで木たかくなりぬ年も位も

前参議為長

しぐるゝや高たか雄をしまふて一夜松

角 上

連歌堂れんがだう

〔船宮の後にあり。毎月廿五日此所に於て法楽の連歌あり、参詣の人連坐に拘らず句を嗣、これを笠着の連歌といふ。又正月四日に裏白連歌あり。凡て連歌の懐紙四枚なり。中古執筆の人謬つて片白を遺して記さず、是より流例となりて片白紙を置ながら、又一紙を添て五枚とす、故に裏白連歌といふ。今此堂に渡唐天神を安ず〕

北野社会所奉行承てかの会所にて

連歌発句

あらぬ名をかるやあまひこほとゝぎす

宗

祇

絵馬堂ゑまだう

〔中門の外西の方にあり。此所に掲る書画詩歌連俳は、都下及び遠き国々よりも、年毎に数くゝ弥がうへに累て献じ、名画名筆多し。中にも南都御祭の図、薪の能の図は、大絵馬にして世に名高し。又月毎の廿五日には、群参

ありて能書麁筆のわかちもなく、手習ふわらはべまでも詩歌を書して、本社のみぐり中門廻廊、あるは松枝梅枝にむすびつけて奉納し侍る事、他境に増りて夥し。年々に捧る石灯炉の数く、松梅の木だちよきを奉るも多し。

聖 ■ 奉納

乙御前 梅さくや白くも濃くも大自在

移 竹

無隼塔

〔画馬所の南にあり。菅霊中華の経山寺に到つて無隼和尚に謁し給ふ由縁により塔をこゝに立る、是渡唐天

神の濫觴なり〕

北野御文庫

〔神楽所の北にあり。菅神御作の書卷を蔵む、又宝蔵ともいふ〕

多宝塔 〔御文庫の南にあり。本尊大日如来、脇士四天王〕

経所

〔神楽所の北にあり。安置する所、普賢、不動、愛染、地藏、聖観音、共に霊尊にしていにしへの朝日寺諸堂

の本尊なり〕

竹画碑中門の東にあり。

画は 宋 紫 石、

銘文筆跡共に土岐中書。

此竹数尺耳而執杭三万仞一木葉彫蠶金錯屈鉄神飛彩動不<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>其墨汚之处<sub>一</sub>所謂公与<sub>二</sub>此竹<sub>一</sub>俱忘<sub>レ</sub>形者也君赫之画得<sub>二</sub>之<sub>一</sub>清人宋嶽<sub>一</sub>々得<sub>二</sub>之<sub>一</sub>■詮<sub>一</sub>々得<sub>二</sub>之<sub>一</sub>李用雲<sub>一</sub>其法尤可<sub>レ</sub>喜也嗟乎称<sub>二</sub>漢画<sub>一</sub>者多不<sub>レ</sub>辨<sub>二</sub>八格十門<sub>一</sub>下筆則曰合<sub>二</sub>天地<sub>一</sub>耳鑿者或左<sub>二</sub>其祖<sub>一</sub>則其尊乃在<sub>二</sub>君赫<sub>一</sub>矣君赫姓<sub>一</sub>宋名<sub>一</sub>紫石江都人也与<sub>レ</sub>余善其徒■段明勒<sub>二</sub>之<sub>一</sub>石以<sub>二</sub>建<sub>一</sub>於北埜菅公祠畔<sub>一</sub>蓋不<sub>二</sub>朽其美<sub>一</sub>也

銘 曰 兔 釈 鶻 落 不 ■ 而 成 虚 心 貞 節 維 神 所 亭

宝曆癸未秋七月

平安 源 之 熙 撰  
副 孟 義 建

絶句碑 〔南の門前にあり。頓阿法師四時和歌を題して五言絶句五十首を咏じて奉納す。石州浜田散人、岸井庸充。詩は繁によつて略す〕

祝寿碑 〔南の華表とりゑの内にあり。草廬龍公美古稀の賀章を鐫、文は略す、背文万寿無量〕

忌明塔 〔同所の南にあり。五輪石塘婆、高サ八尺許。前に石の鳥居あり、古へより服穢を脱る日、まづ此塔に詣で

神拝すと、穴太記に見へたり〕

あやこのやしろ  
文字社

〔西京御供所の南にあり。初め天満神七条文字子に神託ありて其宅に鎮坐し奉る、後世其由縁をこゝにうつし

祠をいとなむ〕